

環境先進都市づくり構想  
～木造耐火建築によるアプローチ～  
第15回次世代木質建築協議会【議事概要】

日 時：平成26年7月1日（火）13:30～15:00

場 所：緑町会館 102会議室（山形市緑町1-9-30）

参 集 者：柴田洋雄 会長（美しい山形・最上川フォーラム 会長）、清野伸昭 副会長（山形商工会議所 会頭）、（50 音順）青木茂美 委員（山形県企画振興部次長）〔欠席〕、安達正司 委員（南陽市 副市長）〔欠席〕、井上圭介 委員（国土交通省山形河川国道事務所長）〔欠席〕、太田純功 委員（山形県森林組合連合会 代表理事専務）、木村一義 委員（大規模木造耐火技術 発明者）、桑嶋誠一 委員（山形新聞社 取締役庄内総支社長兼酒田支社長・局長）〔欠席〕、後藤正信 委員（山形市農林部森林整備課長）〔欠席〕、佐藤英司（株式会社山形銀行 営業支援部長）〔代理出席：副部長 五百川満氏〕、日原もとこ 委員（東北芸術工科大学 名誉教授）、本間義衛 委員（美しい山形・最上川フォーラム 最上川文化・地域経済活性化部会長）〔欠席〕

ゲ ス ト：横山あずさ 氏（山形ゼロックス株式会社 経営企画室 主任）

事 務 局：伊藤憲昭（美しい山形・最上川フォーラム 事務局長）、佐藤浩美（美しい山形・最上川フォーラム 事務局）

関係機関：庄子裕 氏（山形県企画振興部企画振興課 主査）

関 係 者：本田厚 氏（山形ゼロックス株式会社 取締役 経営企画室長）、安部明子（美しい山形・最上川フォーラム事務局）

#### 【開会】

- ・全国7箇所で開催協賛会主催の木材利用推進セミナーを開催している（共催：最上川フォーラム、多摩川フォーラム、後援：林野庁、県、各設計事務所の団体等）。現在4会場が終わり、ひとつの会場で約200名前後の参加があり、関心の高さを示している。最終日は東京の日経ホールで開催予定であるが、現在400名という非常に多数の参加申し込みとなっている。また、柴田会長においては、先般YTS（山形テレビ）の「提言の広場」に出演し、「森林資源の活用と林業の活性化」というテーマでお話いただいた。少子高齢化、人口減という問題があるが、最近はローカルアベノミク、成長戦略は地方からという政策がある。また広島セミナーの前日には同じ会場で、藻谷さんの「里山資本主義」の講演があり、非常に好評であったということを知っている。藻谷さんもハイテク工業時代から6次産業へシフトして、量から転換して価値を高めることの大切さなどもお話しているようである。鮭川村でもシンポジウムをされたようである。
- ・次回については、南陽市の新文化会館の中央部が大きく立ち上がってくるので、9月に入ってからになるかと思うが見学会を予定させていただく。ぜひ多くの方にご参集いただければと思っている。
- ・最上川フォーラムでも山から川、川から海と連携した環境保全、地域経済活性化を両立させる活動を様々行っているが、本日は、「山と川を結びつけるユニークな取り組み」ということで、絆の森でも活動している山形ゼロックス株式会社さんからお話いただく。まず先に柴田会長から一言ご挨拶をお願いしたい。

#### 【会長あいさつ】

- ・今話があったようにいろいろなプロジェクトは森だけ、木材利用だけというのではなく、連携してはじめて継続していくと思っている。時間の流れによる連携もあるし空間的な連携もある。それをどのようにスムーズにするかが最大の問題ではないだろうか。そういう意味でわれわれが今行っているのは、出発点は最上川のゴミの3割を占めている流木を減らすのが目的ではじめた。そこから流木を減らすには森を元気にすることが一番効果的。その森を元気にするためにはどうするか。それは木を使うことという流れで進んできている。
- ・日本全国の7割は森林が占めており、その木を使うために国がいろいろ政策を行っているが、日本全国での国産材の利用率は27～28%ほど。それを国際公約で5割位まで増やさなくてはならないので、林野庁、農水省は積極的に推進している。林野庁は木を育てるのは得意であるが使う方は得意ではない。そういう点からわれわれの活動に関心を持っている。
- ・今開催している地域の木材利用推進セミナーは林野庁からのアシストがあり、開催する都道府県の県庁の方から地域の林業の問題の話もしてもらっている。都道府県レベルの現状の報告とわれわれが行っている新しい木材の利用（どういうことが可能か）の話をしている。今話があったがそれぞれの会場で200名の参加あり、関心を持っている。
- ・この協議会で教えられたことであるが、ドイツでは自動車関連産業は24兆円で安定している。自動車産業は都市部の若い人たちの働く場所である。地方の木材関連産業は20兆円で元気である。ここが日本と違っている。日本は自動車関連産業は元気であるが、木材関連産業が元気でないために、ほとんどの里山を抱えている地方は元気が無い。高齢化、過疎化が見られ、限界集落といわれるところが多くなってきている。そこでドイツと同じように木材関連産業の振興で地方を元気にすることが可能だと考える。今日本国内でも30兆円位の木材関連産業があるが、その中の70%以上を占める外材を全部国産材にして、それぞれの地域で製材、乾燥、集成など様々な価値をつけることを行うと地域に所得が発生する。その仕組みをどうするのかこの研究会の目的にもなっている。

- ・本日の「～森から海への贈りもの～おさかなプロジェクト」は連携した活動を行った話で、非常に興味を持っている。よろしくお願ひしたい。

#### 【関係者】

- ・山形ゼロックスが森づくりを始めた理由から申し上げる。グローバリズム、ローカリズムといわれているが、当社はローカリズムいっぱい、山形県内だけで生きていかなければならない背景がある。今のお話にもあったように地域が元気でないと販売できる場所が無くなる。そのために何をするか考えた時に、今幅広くCSRなどと言われてはいるが、様々な関係者と双方向で良い関係を築くと結果として何か生まれるのではないかと。そうしていく中で始めたのが森づくりである。
- ・会社としての考え方はまず法律を守るのがあたりまえ。次のステップとして利益を出すのがあたりまえ。三番目に社内で倫理的な雰囲気になって、初めて社会貢献活動ができる。このようなことで森づくりの分野は10年かかっている。CSRは10年前に「おさがりパソコン」といってパソコンを貸し出す貢献活動を行ったが、社内で下地がなかったこともあり社員参加者は4年間で4名と増えず、活動が広がらなかった。それに対し森づくりは社内の声から出て始めたが、今は6割～7割くらいの社員が参加している。下地をつくりながらそれを社外にも広めなければならないということでやってきたのが今の活動になっている。
- ・本日の発表であるが、この森づくりのプロジェクトは気づきの連続だった。そのことを様々話させていただきたいと思うのでよろしくお願ひしたい。

#### 【ゲストスピーチ】

- ・本日のテーマの絆の森プロジェクトの一環で実施してきた「～森から海への贈りもの～「おさかなプロジェクト」」について話して欲しいとの依頼を受けたが、その時点では準備段階の途中であったため、結果がどうなるか分からないので依頼を受けることができるか申し上げたところ、チャレンジをすること自体に大変興味があるので、その過程を生々の声として話して欲しいとのことであった。結果は怎么样了か、後で報告も含めながらお話しさせていただければと思う。
- ・話の流れとしては私達が活動している「かねやま絆の森」の活動紹介を最初にして、「お魚プロジェクトまでの経緯と背景」そして準備段階、最後に先週の土曜日（6月21日）実施してきた「お魚プロジェクト」の報告。そしてまとめと将来的な次への挑戦と話をさせていただきたい。

#### ・「かねやま絆の森」の紹介

- ・山形ゼロックスが主体で県や森林所有者と協定を持ちながら森づくりをしていくものである。
- ・山形ゼロックスが絆の森に挑戦した背景について

私達は環境ISOを取得して12年経つ。そのISOについて毎年テーマを決め、少しずつステップアップさせてCSRの基盤を築いてきた。最初は社内の小さな環境の取り組みから徐々に内容を深く、そして幅を広げていって、10年経ってやっと外部の方と一緒に活動する形をとることができた。その中でなぜ森づくりまでいけたかということ、2009年に業務の効率化のためこれまで人の手で行っていた業務を機械化させるという会社からの命令があった。お客様を含めたことなので、こちらの都合だけで行って良いものか、そして取り組んでいく営業やサービスの人たちがおもしろくなければダメではないかと思ひ、業務の効率化がどれだけ環境的に良いか、またセキュリティの面でどんなに良いかを洗い出し、お客様に報告した上で自動化させていただいた経緯があった。その時は「仮想の森 de 植林コンテスト」という企画をして、コピーの複合機の毎月の使用料のメーター締めに関して人手をなくし効率化した。これは経費の削減もあるが、それ以上に環境にとってエネルギーのかからない、またお客様の仕事の手をとめることがない、書き間違いなどのセキュリティ事故が起こらないなどのメリットを洗い出し、営業とサービス担当が自分の足でお客様に紹介をして、共感をいただくプロセスを一番大事にした。県内にある6つの営業所ごとにバーチャル上に山づくり、集金とメーター締めの自動化をそれぞれ1件1ポイントとし、2ポイントで1本のスギの木を植えていくという仮想の森づくりは、1年かけて多に盛り上がり、結果として600台近い複合機の自動化に成功した。そして、社員の中からこの流れで、本当の植樹をしてお客様に報告をしたらどうかと言う声が上がった。これをなんとしても形にしたいということで、県を始め関係先から情報収集をしてやまがた絆の森協定を結んだ。私達の森づくりは、最初は仮想から始まり、本当の森に行ってみたいという希望が形になった。最初は社員だけで行っていたが、年を増すごとに参加企業を招いての活動になり、地元の行政、関係先の方が参加して下さり、今では当社だけでなく、お客様や地域、行政の方が「かねやま絆の森」の中で活き活きと活動することによって、山形ゼロックスの企業イメージと一緒に作り上げていただいている。最初は山形ゼロックスとメーカーである富士ゼロックスの見分けがつかないお客様がほとんどで、山形の中では知名度の少ない会社であったが、今では徐々に環境やCSRをやっている企業というイメージが定着してきている。

- ・「かねやま絆の森」は5年協定。山形県と森林所有者の金山町にある三英クラフトと山形ゼロックスで三者協定による「やまがた絆の森プロジェクト」という協定を結び、第一期生として、シェルターさんや山形銀行さんと共に森づ

くりを継続してきた。

- このやまがた絆の森プロジェクトは内容が自由で、企業によりスタイルが全然違う。そこが非常に良いことだと思う。
- 山形ゼロックスの「かねやま絆の森」の特徴としては、三者協定の他に、お客様である参加企業を受け入れているという点、地元でお世話になっている金山町役場と密な関係を結び、このメンバーで毎回活動をステップアップさせながら行っている。活動は5年目に入った。
- 内容としては森の保育作業はもちろんであるが、森づくり啓蒙、地域交流、地域と県内企業の活性化等をテーマに同じ方向性を目指して活動している。現在全15回のうち14回が無事に終わり、延べ参加人数は581名となった。
- 夏場は森づくりであるが、冬場は森づくり関係者がそろって、いろいろなセミナーに参加して啓蒙活動を行っている。
- 午前中は基本的に森の保育作業を行い、午後からは「タカラモノプロジェクト」ということで、地域交流になるようなレクレーションを兼ねた企画を催している。1回1回が充実していて、参加者同士がコミュニケーションを図り、楽しい活動を継続させていただいている。
- 4年間やってきて、うまく回っていると実感することがある。それは、方向性が皆で一致していること。そして各組織がそれぞれにとって良い活動になるよう、双方向での提案やアドバイスをいただけるため方向性の修正が早く、活動の可能性が広がる。そしてともに作り上げる一体感が得られる。
- 「森と海をつなぐ」企画について
  - なぜこの企画を考えたか。追い風になったのが2、3ある。ひとつは今年の10月には「第38回全国育樹祭」という大きなイベントが山形県で開催されるが、メイン会場となるのが金山町で、「かねやま絆の森」の活動地になっている。森づくりでも今年は育樹祭記念事業として申請登録をし、開催を盛り上げる形で活動してきた。また2年後の平成28年には「第38回全国豊かな海づくり大会」が山形県で開催される予定で、テーマが「森から海へ」ということで海へ関係のある活動をしてみたいと思ったところであった。山形県でも準備委員会が立ち上がり、みどり自然課など森づくり関係者と連携したプレ事業の検討なども始まったところだった。また昨年末に山形県では「やまがた里山サミット」を設立した。「森林(モリ)ノミクス宣言」を県知事がされていたが、その中で、山形県の里地・里山の資源を活かした産業振興・地域活性化こそが山形県の強みであるという宣言をしている。こうした背景から今後ますます、森・川・海の大切さを単独でなく一貫して考え、そこから恵みをいただいている農・林・水産物への理解を深め、その価値を見直す機会が期待されていくと思われる。今後は森だけ、海だけを見る活動から、視野を広げた活動へと変わっていくことが大切ではないかと考えた。これは一般県民だけでなく、企業の社会的責任(CSR)のアクションの一環として企業側にも地域とのつながりを持つチャンスになると考えたのがひとつの背景であった。
  - また、もうひとつ。なぜ川や海を見たのか。皆さん十分ご承知かと思うが、水は私達が活動する里山から小川となり、最上川につながり海へと流れていく。その中で私達はあらゆる恵みを受けて生活をしている。また山形県内には製造業をはじめとした多くの工場がある。私達山形県の企業はきれいな水の恩恵を受けながら事業を継続させているのがひとつの大きな特徴でもある。参加企業から参加動機をお聞きしたところ、例えば魚を扱う仕事や、製造業のお客様は皆さん一様に自分達はきれいな水の恩恵を受けて商売をしているので、会社の責任としても川の上流にある森に入ることが必要だと感じ参加したという話を聞いたことも背景にあった。このようなことから、今回は森から水、地域との関りを知って、森から海につなげようと発展していった。
- 「サクラマス」お魚プロジェクトになぜなったか。
  - 午後に行っている「タカラモノプロジェクト」(地域のタカラモノを見つけようという活動)で見つけたタカラモノにもっと価値をつけようと活動している。調べてみると、山形県の魚「サクラマス」の存在と、年々漁獲高が減ってきていることを知り、それが県の課題だとも言っていた。森林所有者の方と話をし、地域のタカラモノ探しの中で、県の魚「サクラマス」と川と海につながったら素敵なのではないかと言う話になったのがきっかけ。そして、企業の「森と海をつなごう」大作戦を立ち上げた。
- 「お魚プロジェクト」ステップ1:「行政・お魚関係者の理解と協力を得る」
  - これまで4年間活動してきた、森林関係先の方とはだいぶコンタクトも取れるようになったが、今回主管となるのは水産関係、試験場、地域の漁協と全くはじめて踏み込む世界であった。どこからアクションをおこしたらいいか・・・まずはサクラマスをきっかけに窓口を探していった。サクラマスの現状を冊子にして発行していた山形県内水面水産試験場に連絡をして相談をした。そこで窓口を教えてください、主管にたどり着いた。
  - 一貫して提案したのは、まずは山形県のタカラモノであるサクラマスを増やす取り組みをやりたい。そして森づくりと組み合わせたいので、下刈や枝打ちの時期に合わせてできる活動と組み合わせたいということであった。また山形ゼロックス、かねやま絆の森と一緒に活動を行うことでの有益性、何か信頼できるもの(パスポートになるもの)がないと耳を貸してもらえないだろうと考え、当初から自分達の強みである情報公開や啓蒙活動に力を入れてできることを訴えた。それが県や漁協にとってどんなメリットがあるのかも一緒に話しをした。いきなりの提案にどこかの窓口でも最初は警戒され、戸惑われたようだった。また予測していた壁ではあったが、いくら出してくれるかなど予算的なことなどを言われ、企業の貢献活動に対するイメージはこんな状況なのかと思った次第であった。このイメージを何とか変えたいと奮起したきっかけにもなった。

- ・森と海をどのようにつないでいったら良いか、どこで共感をいただいて協力しようという思いになっていただけるかを考え、まずは「山形県の漁業の現状と課題について」のページを参考にして、水産関係者の課題点を調べてみた。調べてまとめていくうちに森の課題と全く一緒だと感じた。そこに生息しているものが森なら林産物や森の木であったり、川なら魚であったり、そこにある資源が違うだけで、それぞれを取り巻く環境や人、時代の問題など課題は同じであった。それなら手を組むことができるのではないかと思った。もし森林組合と漁協が手をつないだら・・・森・川の手入れをすることで変わることについて仮説を立て訴えていった。話をしていくうちに魚関係の方も自分達の課題を話したくなって、他にもある課題なども話してくれるようになった。そして漁業・林業の現場だけでなく、組合自体が抱えている課題も共通していることもわかった。組合としての価値、啓蒙活動がなかなか進まない、外部組織との協業の必要性は分かっているがきっかけがつかめない、周囲からより理解されたい、活動の情報公開を積極的に行わなければならない等々たくさん課題があることもわかった。企業としても貢献活動として地域との関係性を一番得たいと考えているため、知らない業界同士ではあるが、それぞれ強みを持ち寄ってつながれば必ずうまくいくと話をさせていただいた。最初は警戒していた方々も後の方では成功させよう、と逆に励まされるようになり話が進んでいった。
- ・各関係者と話をしていくうちに最上川フォーラムの川健康診断との出会いがあった。やまがた絆の森プロジェクトの協定の横のつながりから紹介を以前もらっていて、川での活動をする際は一言声をかけて欲しいということをお願いし相談をしてみた。稚魚を放流するだけでなく、川と参加者をつなげるアクションが欲しいと思っていたのと、最上川フォーラムでもこの活動をもっと企業に広めたいため、実施する運びとなった。
- ・「お魚プロジェクト」ステップ2：「地区、森づくり関係者の理解と協力を得る」
  - ・ある程度、魚関係者の方から一緒に行く確約がとれた時点で、森づくり関係先にやりたいこと、予定などを伝えて、やりたいことがあったら力を貸して欲しいと案内をした。今回はじめて稚魚の放流・川健康診断を実施する漆野・春木地区には森林所有者から同行してもらい区長さんに挨拶にいった。地元にも子どもがいなくて、年寄りしかいないが、回覧板で告知をしたいという話もいただき、チラシをつくりこの地区で活動することになった。
- ・ステップ3：「稚魚の調達と川健康診断をどう進めるか」
  - ・稚魚の調達が一番苦労した点だった。森づくりに関しての予算は取っていたが稚魚を買うお金が無かった。今思えば無謀なお願ひであったが、稚魚を買うお金は無いが人手は確保できること、啓蒙活動ができることなど話をさせていただき、この状況で実現できる方法は無いのか関係先をお願いをした。魚関係者の方が話し合いをしてくれて、県から各漁協へ放流委託する分を使わせてもらってはどうかと教えていただき、県の内水面漁連（各地区の漁協を取りまとめているところ）からは最上漁協にチャレンジを促し背中を押してもらうなど、強烈にバックアップしていただき、結果として県の放流委託分の稚魚を無償で使わせていただくことができた。稚魚の確保が一番心配していたことだったので、解決してとても良かったし、こういうことができるということはどの団体でもなるべく経費をかけないで、このような取り組みができると確信したところであった。
  - ・川健康診断をどのように進めていくかでは最上川フォーラムにお世話になった。
  - ・準備を進めていく中で、より良い活動になるために動き出す関係先ということで、コンソーシアムの仲間が、良いと思うことは自分達でどんどん提案してくれた。絆の森では方向性が大体定まっているので、基本的に提案していただいたことはノーとは言わない。その代わり主担当として力を貸していただくようお願いをしている。森林所有者は、漁協の皆さんが午後のお魚プロジェクトだけでなく、午前中の下刈りから参加することを受け入れてくれて、午後はお返しに森林組合が川で活動をする交換留学のようなことが可能になった。それから金山町役場では町長の参加も調整してくれ、町の協力隊からも視察させたいと集めていただいた。繰り返し実践してきたことが確実に根付いていることを今回改めて感じた。山形ゼロックス単独で各所にお願ひしていたら実現はできなかったと思う。強みを持ち寄って作り上げることは繰り返しの賜物だと感じた。
  - ・当日は盛りだくさんのスケジュールで、充実した活動になった。当初は30名程度の参加者の予定であったが、蓋を開けてみたら75名まで参加者が増えて何とか乗り切ってきたところであった。
  - ・当日は、午前中に下刈活動が終わり、お昼には参加者達が企画してオカリナやピアノのコンサートを開いてくれたり、紙芝居を読んでくれた。また内水面水産試験場の方からは「森・川・海につながるサクラマスのお話」というテーマで講話をしていただいた。午後に川健康診断を行って、子供達にとっては少し難しいところもあったが、大人が夢中になって行っていたことには驚いた。各組織の方たちがランダムになるように9人くらいの班を作って、同じ輪の中でコミュニケーションをとりながら進めていった。
  - ・最後に「全国育樹祭」と2年後に行われる「全国海づくり大会」の記念の横断幕2枚を並べて撮影をした。この記念写真を撮りたかった。これによって本当に森から海への活動をつなげることができたかと思っている。
  - ・川健康診断は「どんな川だったら魚が帰ってこられるか」をイメージするのに大変良い体験だった。調査項目の中に「ゴミは落ちているか」という項目もあり、もちろん見つけたゴミは自分たちで拾った。ただ稚魚を放流するだけでなく、川の状態を知り、川をきれいにして、ここで始めて安心して稚魚を放す。このプロセスを経験すると参加者はその後も川に対する意識、関心が持続するのではないかと感じた。この日、川健康診断を行った参加者たちが家

に帰り、近所の川を見て「この川はどのくらいきれいなのだろう」「ここには魚が帰ってくるのか」というような会話ができれば良いと感じた。こういう意味でただ稚魚を放流することにとどまらない活動ができて本当に良かったと感じている。

・まとめ

- ・皆さんが始めの一步を持ち寄って成り立っているが、大事なことがいくつかある。
- ・ひとつは参加者が目的を理解し、使命感を持って活動すること。自分もいろいろな植林関係のイベントなどにもお邪魔する機会があるが、中には現地に集合して植えて解散するようなものもある。参加者からすると今日の目的は何か、自分達が活動することによりどのくらい役立つのか、誰が喜ぶのかなど、最初に教えてあげるだけで参加者のやる気が全然違う。この日も例えば下刈の時には、杉苗の成長を下草が妨げるため、それを取り除いて杉の成長をみんなが助けるということをお話する。するととどンドン下草を刈る。作業後の見違える景色を見て、何ともいえない達成感と自分でも役に立ったという満足感、自信につながる。それと同様に川でもどんな川だったら魚が帰ってくるのか、なぜ綺麗ではなければならないのかを先にお話をしていた。このような説明があるだけで参加者が何を求められて来たのか、気持ちに火が着く。これを繰り返していくと参加者の満足度は参加者自身が上げてくれるようになる。
- ・二つ目としては、すべての組織が「ありがとう」の関係でつながる活動が一番である。今回は、最初は構えていた漁協さんが、活動の最後には一番良い顔をして、活き活きと話をしていた。参加して本当に良い活動だったと感謝の言葉を身振り手振りで皆さんに話していた。同じく森林組合さんも大変喜んでた。

いつも接することのない様々な組織の人同士のコミュニケーションでは、参加者が「相手を知る」「自分たちのことを知ってもらう」ために一生懸命になる。活動の目的を果たした達成感のほかにも、参加者同士で相互理解できた自信と刺激が両組合の心に残ったようだった。どの組織もはじめの一步は勇気を出しての参加になるが、活動が終わった後に思い切って良かった、役に立てて良かったと思ってもらえる活動であれば次回また必ず協業の機会につながる。

- ・「かねやま絆の森」が提供できたこと。

企業が地域に提供できるものは、お金や物などはもちろんであるが、そうしたものとらわれず、「機会」「チャンス」であっても良いのではないかと思います。今回私達が提供できたのは「機会」であった。感想を例示すると、参加企業さんにとっては「大変参考になった。ありがとう。」行政にとっては「大変良い活動にしてくれてありがとう。また次回一緒にやりたい。」と言う声が寄せられた。チャレンジする機会を企業で作り上げて、地域に入っていくことがこれからスタンダードな形になっていくのではないだろうか。今回のような活動が続いていけば、森と川が物理的に整備されるだけでなく、人と人がつながれる。その活動のテーマが毎回変わったとしても力は合わせられるようになる。

・今後の夢、チャレンジしたいこと

- ・今回の経験や人のつながりは私達だけで終わらせるのではなく、県内各地でなるべく手間をかけずに、同じような質でできるように、メニュー化をしてシステムづくりを図っていくことができたかと思っている。かねやま絆の森にしかできないと言うのは、決して褒め言葉ではないと受け取っている。システムとして残し、いろんな団体さんが活動できるような仕組みづくりができて、はじめて地域のためになれるのではないだろうか。
- ・企業の地域貢献はリスクも抱えている。事業活動の中で続けていかなければならないので、企業のビジネスの都合でやめざるを得ないことが出てくるかもしれない。そうなった時に企業が抜けても地域のつながりが残っていればこのつながりを自発的に続けていただくことができる。そのために「機会を提供する」といった地域貢献は山形ゼロックスでもできることであるし、さまざまな企業でもできることであると思う
- ・毎回とっている参加者アンケートをもとに活動報告冊子を作成しているが、(手元の配布物)最初は観光目的も兼ねてなんとなく参加していた従業員たちであったが、質問の機会、経験の機会を繰り返していると、一人ひとりが、立派な森づくり親善大使、川づくり親善大使、金山町親善大使にもなる。いかに継続することが有効で大事であるか改めて感じている。

【委員】

- ・当社でも絆の森の活動を行っているが、きめ細かく周りの人を巻き込んで丁寧に大変すばらしく、学ぶところがたくさんあると感じた。
- ・サクラマスを増やすといことであるが、サクラマスの稚魚を放流しても金山川だとサクラマスにならないということであるが。

【回答】

- ・稚魚の時は一緒であるが、海に行き帰ってくるとサクラマスになり、海に行かずに川で過ごすのはヤマメになるそうである。いたずらに稚魚を放流してはダメだということを最初に教えていただいた。活動場所の選定は、金山川は帰ってくる環境に無いため、漁協からアドバイスをもらって、下刈り会場から車で十数分の所にありサクラマスを釣っている人もいるという中田春木川に決めた。

【委員】

・魚の値段が上がらないということがあったが、米の消費も増えていないように食生活が変わってきたということである。魚を食べなくなったので、米も食べなくなったため消費が増えていない。もう少し魚の消費が上がれば米の消費を増やすことになると思う。

**【関係者】**

・このプロジェクトには山形丸魚さんが初年度から参加している。CSRのコンサルをさせていただいている関係で一緒に考えながらやってきた。丸魚さんでは、食育や魚食普及活動で県内の学校やイベントに出張するなど、魚の消費を増やそうと地道な活動を何年も続けていることもあり今回は山形丸魚さんにもスポットを当てたいということもあった。2年後の海の感謝祭は丸魚さんが主役になってもらえたら嬉しい。

**【ゲスト】。**

・森林所有者の方の次の野望としては、川が終わったら、次は農だと言っていて、田んぼに流れるので、米に関心があると言っていた。金山まちづくりの視察団の方（森林関係の方や、農協さん、地元の料理屋さんなど）のドイツに視察の時に話が出て、「お魚プロジェクト」の第2弾のように、米にいつかはどうかという話はいただいている。

**【委員】**

・米の美味しいところは沢水がある。沢水を直接引いているところの米は美味しい。山をきれいにすることは美味しい米につながる。

**【関係者】**

・最初の1年間は森だけを見ていたが、生活圈、活動がどんどん広がってきている。

**【委員】**

・地道な継続をお願いしたい。

**【委員】**

・米を作っているのは農業関係者であるが、魚の消費をどうするかを一緒に考えるとまわりまわって自分たちの米にもかえてくるので、そういう発想を持ってもらいたい。

**【委員】**

・すばらしい活動であると感じた。森林組合と漁業組合との結びつきを地域への広がりへと結びつけたら、もっと素晴らしくなるのではと思うが、どのように考えているか。

**【関係者】**

・私達の考えでは、いきなり最初から金山町に入っていって地域の人たちに良いことをやっているから来てくださいと話しても絶対に来てくれないと思った。何年かやっていくうちに、地域からも声が掛かるような関係性になったら広げて行こうというスタイルにしている。今はみどりの少年団の子どもたちと一緒にベンチを作ったり、老人ホームにきのこを持っていったりしている。そろそろ一緒になってやっていこうという、少し大きめな動きになるかもしれない。

**【委員】**

・子供が大きくなひとつのポイントである。活動がもっと大きくなると思う。ここまでできているので、地域全体で活動をして交流を広げるのが重要。

**【関係者】**

・毎年収穫したキノコを町の小中学校へ寄贈している関係で、昨年始めて金山小学校から学校給食に招待された。

**【委員】**

・金山町で釣ったサクラマスを使った給食が実現できれば良い。

**【ゲスト】**

・金山町自体受け入れ体制の考え方がしっかりしていて、地域協力隊を関東から2人受け入れ、この人たちを積極的に参加させている。金山町のドイツ視察団の中の話でもこの森づくりを街づくりに活用して何かできないかと話になったりしているようである。私達の理想としては、仕組みはつくったので、最終的には町の中でこういった取り組みが継続していつもらえるようになることが一番である。

**【委員】**

・町の活性化に結びつけるのが一番かと思う。

**【関係者】**

・町の活性化をいかに継続させるかを悩んでいる。森林をやると言うとも10年後、20年後の限界集落が見えてくる。何かが無いとダメだろう。20年経てば県内の人口が減っていくので、その中で就活できる人口をいかに回せるかが難しい。逆にローカルに都会から人を引っ張りこんでくるとかライフスタイルにからませてみていかないと難しいのではないだろうか。

**【委員】**

・岩手県で川がきれいだから、牡蠣が美味しいと言われていてそれと似ている。それが町の名産になっている。

**【ゲスト】**

・今回も最上漁協さんとしても牡蠣で復興のために森づくりから始めるというニュースを見て、漁協さんたちが自分達も

森づくり、植林などをやらなくてはいけないという話までは出たと言う。ただそこからどうしたら良いかわからなかったようで、本当にきっかけ待ちで、必要性を感じていただいていることがわかった。

**【委員】**

- ・今回はサクラマスを中心にした森林整備を考えられたが、もう少し魚の種類が多くなればどうだろうか。

**【ゲスト】**

- ・こういう信頼関係・集合体ができると、次のテーマを何に変えてもできると思う。そこまでいく関係性づくりが大事であり、そのひとつの選択肢として森づくりもあることを自分達は啓蒙していった。森、川、海は共通の垣根のないテーマできっかけになるのではないかと思う。

**【関係者】**

- ・いろいろな企業さんが関わっているが、考えが似ている企業が多く、話し合うといろいろなことが見えてくる。CSRの場であるが、ビジネスのマッチングもできたりする。3.11の震災の年に森づくりをやるかどうか迷ったが、防災の機能も大事だということでやった。その時に参加企業さんや行政の方も何かあった時との会話から、協定など無くても協力体制をとる話になった。新しい発見であった。

**【委員】**

- ・CSRは環境を中心に発展してきたわけであるが、ひとつの産業、新しい産業を生み出す6次産業に結びつけることができるのではないかという感じがする。

**【関係者】**

- ・今の感覚だとできそうな気がする。
- ・山形県の企業の6、7割は地域で活動しないといけないところが多い。海外進出などはほとんど考えていない。そういう企業が圧倒的に多い中で生き残るにはグローバル化はできないと感じる。サービスの労働人口が意外と多い。労働集約で地域密着型で、働く人がなくて潰れてしまう。そういう人たちが林業などにうまく流れる仕組みでできるのではないかという感覚はある。

**【委員】**

- ・柴田会長が言っているように、林業は労働を吸収する、受け入れる力がある。

**【関係者】**

- ・今注目しているのが、朝日町さんのクラウド整備化である。

**【委員】**

- ・頑張ってもらいたいが、現実問題、毎年県内人口が12,000人位ずつ減っている。大江町や朝日町、西川町などが毎年ひとつずつ無くなっている換算。あと10年すると110万人を切ってしまう。100万都市1つ分が無くなるということであるので、シビアに考えていかなければならないと思っている。

**【関係者】**

- ・金山町で調べてみると2050年の就活人口、働ける人が28人しかないと言う予測が出ている。それを見た時に愕然とした。

**【委員】**

- ・現実を直視していかなければいけない。あらゆる厳しい現実を見て、未来のビジョンを考えていかなければならない。

**【関係者】**

- ・CSRについては経営的な位置づけが議論される。ビジネスの中核において、儲けるのがCSRだと考えているが、単なるボランティアだという意見も出る。そうして分けてしまうと長続きできなくなる。絆の森は当社にとっても参加企業にとってもビジネスとのマッチングの場でもあるし、新たなビジネスチャンスもある。地域の課題や将来についても自然に話題になる。その人たちと協働していく場がなくなるということは経営にも大きな影響がでてくる。

**【委員】**

- ・それだけ重要さが増しているということである。

**【関係者】**

- ・そこまでやらないと町の受け入れも消極的になる。観光バスでやってきて1日一人2,3本植えて温泉に入って貢献活動をやってきたというような活動は関係者を落胆させる。当社でこのようなCSR活動をすることにより地元の対応も変わってきた。

**【委員】**

- ・CSRが利益の源になるかという少し難しいかもしれないが、利益を出すのは何か長い時間で考えると、利益の源になっている。短くはダメ。それはそこに関わっている社員の働き甲斐になり、社員の質が上がり、長い目で見ると影響が大きい。本来の仕事ばかりだと単純だったりするが、CSRに参加することにより普通している仕事とは異質のものになる。そのため参加企業がCSRを核にしていなくても、社員が興味を持ち、CSRに触れることにより社員の考え方が変わってきて、結果として会社にとってメリットになることがあるように感じる。

**【関係者】**

- ・そのとおりで、教育の一環として、変えさせたくて、人選して送り込んでくる企業さんもある。

**【委員】**

- ・大都市では大きい会社で利益が上がって給料が高いが、そういう会社ではその人でなくても会社は成り立つ。ところが地方にいるとその人がいなくなると困ったということが多い。自分の存在感を知ることが大事だと思う。参加企業がメーカーの場合、流れ作業なのでその人でなくても良いかもしれない。でもCSRに関わるとその人でないといけないということがある。地域に若い人を求めようとするには、給料は高くできないがその代わりに何を出すか、ここにいるという満足感を感じてもらおうようにする。こういう活動に様々な形で参加することにより、将来の働く場所をCSR+α、例えば農業+CSRとか林業+CSRでも良い。自分の存在感が見えてくれば、若い人も魅力を増すことができるのではないだろうか。

**【関係者】**

- ・そういう傾向はある。大学生の応募のセミナーの参加者が増えた。60人くらい集まるが、聞くとみんながこの活動をみてくれている。地元でこういう活動をやっている企業を知った。地元でやりたいと応募が増えて驚いた。

**【委員】**

- ・この話はすごくわかる。若い人はそのあたりはすごく敏感である。かつては給料や待遇を良くすればと鷹を括ってきたが、それだけではない。皆さんそこに関心を持っている。

**【ゲスト】**

- ・会社の経営層の方もそういう意識を持っている方が増えてきていると感じる。会社の中の世界しか知らない従業員に対して危機感を覚えている。社会人になって毎日パソコンと電話に向かって少し疲弊しているような社員達に、社会の中で活躍する場や、やりがいを見つける場を模索している。その中で森づくりをひとつのツールとしての可能性を感じているから参加したという経営者の方もいた。その話を多くの参加者の前でフラットに話をしてくれた。従業員レベルの参加者は、そういう経営者がいる企業は絶対良い会社だと感じ、頑張っただけという話になった。また、経営層の方がそういう話を聞くと参加企業同士で助言し合い、共感になり刺激が生まれる。単にボランティアとか貢献活動のポーズとして活動する企業もあるかもしれないが、中には社内の課題解決の場を外に求めている企業があることも事実。アンケートをとった結果でも、外の森づくりに可能性を感じると応えた経営者の方が多かったと聞いている。

**【委員】**

- ・ISOから発展した考えだろうが、どちらかと言うとひとつの条件などがあり、ISOは建設業が多かったが、それを発展的にここまでしたことはすごいと思う。山形県の絆の森プロジェクトの現状はどうなのか。

**【関係者】**

- ・昨年あたり、少し新規の参加企業が減ったが、協定企業の横の連携など広がりは大きくはなっている。

**【委員】**

- ・公益の森づくり支援センターの事務局長もしているが、絆の森は27、8社になっている。前は「企業の森」といって、森づくりしている企業をバックアップしようというものであった。「絆の森」に名前を変えて、コンソーシアムということが出てくるが、これを意図しているのが大きな違い。今の話を聞いて、コンソーシアムの活動がここまで次元が高くなって、皆さんが嬉々として活動していることに非常に感動した。スタートさせた時、みどり自然課の課長をしていたが、最初はコンソーシアムを現実に行えるのかずいぶん議論した。森づくりがここまで人を結びつける大きな力になっていることに感心している。
- ・森と魚に結びつけて「全国豊かな海づくり大会」にもつながるし、テーマの設定がタイムリーでうまいと感じた。趣旨を説明し理解してもらって進める企画の立て方が良いとつくづく感じた。機会をつくって、その提供者になり、活動は毎回変わっていてもきちんとやれていると話されているが、活動テーマについて今想定しているアイデア、どんなことを考えているか。

**【回答】**

- ・5年協定の最終年であるが、森の保育のスケジュールは5年間分事前に初年度に森林所有者の方が決めてくれている。本当の意味で来年以降どうするかはこれから森林所有者さんと話し合いをしながら決めていかなければいけないことである。今回のお魚プロジェクトが森から一歩外に出られたので、もしかしたらこれから関係先の方から提案が出てくる頃かと思っているところである。森の保育作業の定期的な下刈り、枝打ちは続け、午後に行っているタカラモノプロジェクトで広げて質の良いものにしていく。午後からのタカラモノプロジェクトは旬の話題、タイムリーなものが良いので、敢えて流動的に考えていきたいと思っている。

**【関係者】**

- ・絆の森活動を行っている企業さんとの横のつながりが何になるような気がする。

**【委員】**

- ・はじめお魚プロジェクトと山形ゼロックスが結びつかなかったし、森と海も結びつかなかったが、今日話を聞いて素晴



らしいと思った。サクラマスが回遊魚ということも知らなかった。ヤマメは知っているが、それが途中で二つの種類の魚になるということも知らなかった。実際サクラマスはどれくらいの大きさになるのか。

**【回答】**

- ・今回放した稚魚は6センチ、2グラム位。この稚魚が2年後に50、60センチになって帰ってくる。川のヤマメの5倍位の大きさ。説によると一緒に放したヤマメの子供達は強い方は川に残って生活し、川に住んでいけない弱い方が海にいく。いろんな試練を乗り越えて帰ってきた時には体が数倍にもなっているということである。

**【委員】**

- ・金山町と海と最も遠いような感じがするので、まずはサクラマスの試食会を山の中でやってもおもしろいのではないかと。森と海の話というと、庄内の鳥海山の伏流水と岩牡蠣は良く聞くのであるが、このサクラマスの話はロマンに満ちていて素晴らしい。

**【委員】**

- ・山形銀行では「ぐるっと花笠の森」をやっているが、お話を聞いて素晴らしいと思った。今回育樹祭もあるので、充実する取り組みにしようとしている。また何かあればご協力いただきたい。

**【関係者】**

- ・こういった活動は継続していくのが大変だと思っている。特に2、3年で異動がある。継続していくこと、実施していく主体がどうしていくかが課題になってくるのかと思ったところであった。県としても支援できるものもあるが、結局事業とセットになっているものが多く、イベント今であれば「海づくり大会」と数年後計画されているものがあるのでお手伝いできる場所があるかと思うが、それが終わったら次に何があるかは難しいところである。継続して活動していただければありがたい。

**【委員】**

- ・森のものは木。木の利用を核にして、田舎に若者が住みたくするような環境をつくる必要がある。木工作家を育てる。一人前になるまでは食べていけないので、まわりの地域の人たちの協力や廃校などのスペースを使えるようにし、企業が木工機械等を提供し、一人前になるまで育てる。多くの人は育つが、技術力ができると外に出て行ってしまふことが多い。そうすると長続きしない。企業でその作家の地域の共同ブランドを作り売る工夫をする。僻地、廃校などをうまく利用し、彼らを暖かく見守りながらそこで育てるプロジェクトはどうだろう。それにはいろいろな企業、大学が協力していかなければならない。地域を元気にする一番の基本は若い人なので、若い人が住みたくするような、自分の存在感を感じることができるような支援ができれば良いと感じる。機会があったら考えてみて欲しい。

**【閉会】**

- ・次回は南陽市の新文化会館の見学会を予定している。よろしくお願ひしたい。